

# Column コラム

## HORIBA Europe GmbH Darmstadt Office ～研修体験～

株式会社堀場製作所  
法務・知的財産センター  
知的財産部 織田 香織

HORIBA Europe GmbH Darmstadt Officeは、エンジンテスト、パワートレインテスト、ブレーキテスト、風洞実験などの機器の製造・販売を行っており、ドイツの南部、Darmstadtという町に位置する。

“海外で生活し、様々な人と交流して得た感動や驚きの体験は人を大きく成長させ、また、グローバルな視野を持つためには、実際に海外体験をしてみることが最も有効な手段である。”このような信念と期待とを持ちつつ、私は堀場製作所のある京都から、単身ドイツへと渡り、2007年～2008年の約1年間をHORIBA Europe GmbH Darmstadt Office(当時はHORIBA Automotive Test Systems GmbH, 以下HE Darmstadt Officeという)で過ごすこととなった。

私とHE Darmstadt Officeとの出会いは約3年半前にさかのぼる。当時、堀場製作所の主力製品である排ガス測定装置をメインとした自動車試験装置の特許業務を担当していた私は、約3年半前にHORIBA Groupの一員となったHE Darmstadt Officeの特許業務をフォローすることになった。しかし、日本からドイツへ、実際に目に見えない製品の特許出願や特許係争案件を担当することには、想像以上に様々な困難が伴った。そこで、HE Darmstadt Officeにて製品技術を勉強するべく、また、HE Darmstadt Officeの知的財産業務の現状把握と今後の業務展望を考えるべく、百聞は一見に如かずという思いでドイツへと渡った。

HE Darmstadt Officeの印象、それは、私にとっては今までかつて見たことのないようなものだった。

彼らの私へのホスピタリティには日々驚かされ、また、社内ですれ違うたびに互いに笑顔で挨拶を交わす姿勢は、日本にいてそのような基本的なことにも意識が薄れがちであった私にとって、自らの態度を見直す良い機会と

なった。また、就業時間に集中して業務に取り組むことで無駄な残業はなく、皆がアフターファイブの時間を有意義に過ごしていた。

これらのことは、ドイツへ渡る前から情報として自分の頭に入ってはいたものの、想像していたことと実際に目で見て肌で感じることとは大違いであった。人生の楽しみ方、それを彼らは本能的に知っているように見えた。

HE Darmstadt Officeの歴史は、株式会社堀場製作所による買収前のSCHENCK Groupであった頃にさかのぼる。1881年、Carl Schenck氏によって鉄鑄造と計量器の会社、Carl Schenck AGが設立され、1928年に初めてDynamometerおよびBrake試験装置を同社で開発した。その後、自動車と部品の開発テストシステム、製造部門での試験設備の分野を中心に事業を広げ、1998年3月にCarl Schenck AGの子会社として自動車関連計測事業を行うSchenck Pegasus GmbHが設立された。2005年9月にはCarl Schenck AGのもつ3つの事業分野のうち、事業活動の20%を占める自動車関連計測事業部門(DTS=Development Test Systems)を堀場製作所が買収した。それに伴って、Schenck Pegasus GmbHがHORIBA Groupの一員となり、その名を変更してHORIBA Automotive Test Systems GmbHとなった。2007年12月時点で、HORIBA Automotive Test Systems GmbHは、従業員数は約270人、資本金は5百万ユーロ、HORIBA Europe GmbHの100%完全子会社であった。2008年にHORIBA Europe GmbHと合併し、HORIBA Europe GmbH Darmstadt Officeとなった。

HORIBAはSchenck DTS部門の買収後、従来から得意とする排ガス計測を核としたエンジン計測事業から、エンジン、パワートレイン開発など、自動車の開発全般に対する計測設備を提供できる“トータルソリューション”の

供給が可能となり、総合計測設備メーカーへと事業を拡大している。

HE Darmstadt Officeでは、私は製品技術を学びながら、知的財産業務に携わっていた。知的財産業務とは、特許出願業務や特許係争対応、特許検索や知財管理などである。具体的には、例えば、HE Darmstadt Officeにて新しい発明が生まれた場合に、特許検索をし、その発明の特許性判断を行う。また特許係争対応では、問題となりそうな競合他社特許に対して、権利解釈を行ったり侵害・非侵害を検討したりする業務などである。このように知的財産に関する全ての業務に従事していた。

このような業務を通して、私はまず、HE Darmstadt Officeは特許に対して前向きだと感じた。新規発明の届出数が今年は格段に増え、また、積極的に他社特許に対するアクションを起こしたり、競合他社特許のチェックを定期的かつ詳細に行ったりすることでリスクの低減を行っている。また、開発部署からの要望で社内特許セミナーを開くこともあり、特許に対する意識が高いことを感じた。また同時に、彼らの特許に対するモチベーションを保つことも私の使命の一つとなった。

このドイツで過ごした1年は、私にとって大きな変化の1年であった。自分の中で一番変わった部分は、“理解し、受け入れる”ことができるようになったことだろう。新たな文化に触れて感じて、自分の当たり前だと思っていたことが当たり前でない世界で暮らすことで、様々なことを知り、相手のことを理解する幅が広がったように思う。今までいかに自分が狭い視野の中で、物事の良し悪しを判断したり、解決策を考えたりしていたかを、本当に実感した1年だった。

HORIBA Groupは世界各国に位置している。それは我々の顧客が世界中にいることに他ならない。それがゆえに、我々は日本文化のみならず世界の文化を知り、理解し、受け入れることが必要なのである。

この1年の心の成長、経験こそが私の研修の成果であり、帰国後にこの経験を社内に伝え広めることが私に課せられた使命でもある。

そして、真にグローバルなHORIBA Groupの実現を目指すことを心に誓った。



図1 筆者送別会での記念写真  
筆者は中央で、研修受け入れ部署(Order Processing & Export Control Team)メンバーに囲まれ、彼らからプレゼントされたTシャツ(皆で撮った写真がプリント)を試着。